

霊宝館だより

題字・畚野光義師



写真は明治17年（1884）に再建された伽藍六角経蔵で、現在の経蔵は昭和9年（1934）の再建。絵ハガキより複写

霊宝館だより 第99号

平成23年6月27日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
（財）高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

開館時間

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

休館日 年末年始のみ

拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

専用駐車場あり

夏期特別展

「女性と高野山」

平成23年7月16日（土）

～9月25日（日）

浅井長政夫人像〈お市の方〉

期間限定特別公開！

詳しくは2～3頁をご覧ください

第99号 目次

夏期特別展「女性と高野山」のお知らせ……………2～3

収蔵品の紹介73……………4

高野山の古建築 第三回……………5

考古学から高野山の伽藍「中門」を
考える（その二）……………6～7

高野山金剛峯寺の発生と修験道（二）……………8～9

エッセイ 孔雀伝説……………10

神は細部に宿る 第六章……………11

霊宝館の庭園……………12

平成二十三年度夏期特別展

「女性と高野山」

期間 七月十六日(土)～九月二十五日(日)

前期 七月十六日(土)～八月二十一日(日)

後期 八月二十三日(火)～九月二十五日(日)



国宝 仏涅槃図 金剛峯寺



国宝 恵喜童子立像(八大童子立像のうち) 金剛峯寺



重文 十卷抄第九巻 天部上 吉祥天女 円通寺

主な出陳品

■ 絵画

- 国宝 仏涅槃図 金剛峯寺〈前期〉
- 国宝 善女竜王像 金剛峯寺〈後期〉
- 重文 伝熊野曼荼羅図 龍泉院〈前期〉
- 重文 八字文殊曼荼羅図 正智院〈後期〉
- 重文 毘沙門天像 光臺院
- 重文 弁才天像 宝城院
- 重文 一字金輪曼荼羅図 遍照光院
- 重文 十卷抄のうち 天部上・下 円通寺〈前後期で入れ換え〉
- 重文 弘法大師・丹生高野両明神像(問答講本尊) 金剛峯寺〈後期〉
- 重文 九品曼荼羅図(当麻曼荼羅図) 清浄心院〈前期〉

高野山は弘仁七年(八一六)の開創以来、明治時代まで女人禁制が厳しく守られていた特殊な場所です。九度山町の慈尊院や高野山をとり囲む女人道、女人堂はその名残をとどめています。高野山には弘法大師空海を慕う女性たちにより、また母の往生を願う子らにより、古来多くの宝物が奉納され、堂舎や供養塔が建立され、今に伝えられています。彼女ら、彼らの中には美福門院、北条政子、豊臣秀吉、石田三成といった歴史的に著名な人物の名も数多くみられます。

一方で高野山の地を守護するのは女性の神さまで。丹生明神(丹生都比売)は高野山の地主神で、壇上伽藍の御社や山麓かつらぎ町の天野社に祀られています。また、弁才天信仰も古くから盛んです。

今回の特別展では、高野山に伝わる貴重な宝物の中から、「女性」をキーワードとして、女性神の尊像や、女性が関わった奉納品などを紹介いたします。

現代社会における女性の活躍は目ざましく、その影響力は計り知れません。しかし、時に歴史の表舞台に立ち、また精神的支えとして女性が果たしてきた役割は、長い歴史の中でも決して小さいものではないかと思われれます。高野山を通して「女子」のパワーを断片的にも感じ取っていただけたら幸いです。

期間限定特別公開
浅井長政夫人像〈お市の方〉

重要文化財 持明院蔵
8月13日(土)～15日(月)
9月23日(金・祝)～25日(日)



重文 弁才天像 宝城院



重文 毘沙門天像 光臺院

ミュージアムトーク (展示解説)

7月23日(土) 午後2時～3時
参加費無料。事前申し込み不要。

当館学芸員による土曜講座「女性と仏教」

8月27日(土) 午後2時～3時
会場：当館迎賓館。参加費無料。定員40名。電話予約可。



靈宝館開館90周年
記念法要を奉修



靈宝館は、平成二十三年五月十五日(日)に開館九十周年を迎えました。
本館紫雲殿正面には、国宝・阿弥陀聖衆来迎図を奉掲し、開館当時の展示を再現。さらに、靈宝館設立発起人の一人、益田孝氏(一八四八～一九三八)発願造立の弘法大師坐像(赤堀信平作、高野山龍泉院安置、写真左)をお迎えし、松長有慶管長猥下の導師のもと、記念法要が厳かに執り行われました。
当日は国外からのお客様も含め、一千二百人を越える方々にご来館いただきました。

- 彫刻
国宝 惠喜童子立像(八大童子立像のうち) 金剛峯寺
弁才天立像 金剛峯寺
- 工芸品
鞆鼓胴(天野社伝来) 金剛峯寺
- 書跡
国宝 大伴氏女御影堂陀羅尼田寄進状(続宝簡集五)
重文 放光般若波羅蜜經第九(五月十一日經) 竜光院
重文 紺紙金字一切經(荒川經) 金剛峯寺
重文 高麗版一切經 金剛峯寺
重文 大毘盧遮那經 八帖のうち 竜光院
- 考古
重文 比丘尼法藥經塚出土品(願文・供養目錄・曼荼羅・經筒) 金剛峯寺

収蔵品の紹介 73

重要文化財 紺紙金字一切経 (荒川経) 3575 卷

平安時代 縦 23.2 cm

金剛峯寺蔵



荒川経 妙法蓮華経序品

紺色の紙に銀泥で界線が引かれ、金泥で文字を書く、さまざまな種類のお経です。「見返し」と呼ばれる、表紙の裏側にあたる巻頭部分には、金・銀泥で説法するほとけの姿などが素朴なタッチで描かれています。

この、三五七五巻が現存する一切経は、鳥羽上皇（一一〇三～一〇五六）の皇后・美福門院藤原得子（一一一七～一〇六〇）が鳥羽上皇の菩提を弔うために発願して作られたものです。平治元年（一一五九）七月に高野山の壇上伽藍に六角経蔵を建立し、その中に納められました。「荒川経」と呼ばれるのは、一切経奉納の際に、法会を行うための費用として、美福門院所領の荘園である安楽川荘（荒川荘とも書きます。現在「あら川の桃」の産地で有名な和歌山県紀の川市桃山町）を寄進したことに由来します。六角経蔵も別名荒川経蔵とい

います。高野山は明治時代まで女人禁制、女性が入ることはできませんでした。自らが建立した経蔵を見ることができない、というのはどんな気分だったのでしょうか。しかし彼女の遺骨は遺言により高野山

に納められました。奥之院とは少し離れた場所、不動院の近くに美福門院陵があります。

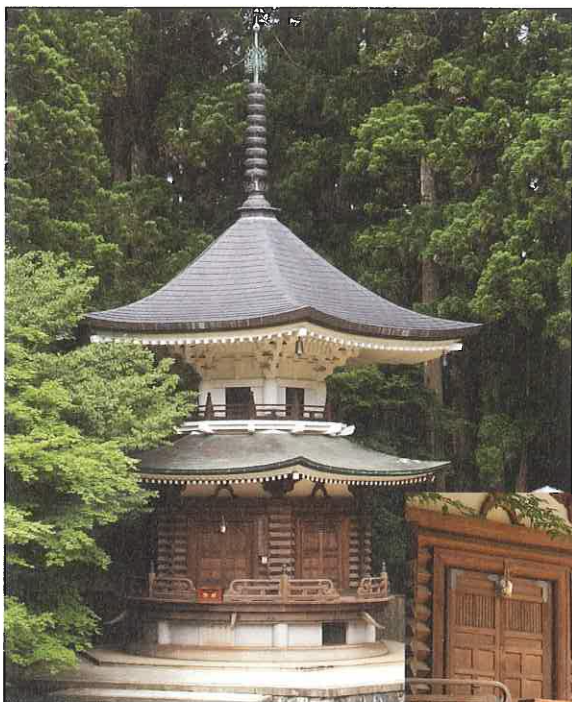
六角経蔵について

六角経蔵は創建以来、老朽化や焼失などによりこれまでに四度再建され、現在の建物は昭和九年（一九三四）に建てられたものです。基壇には取っ手が付いており、押すとこの取っ手が付いた部分が回る仕組みになっています。これを一回転させると一切経を全部読むのと同じ御利益があるそう

です。余談ですが筆者も小学生の頃に回したことがあり、大勢で力を合わせてもなかなか回らず、大変だった記憶があります。

江戸時代の文獻『紀伊統風土記』によると、経蔵の内部にはこの一切経の他に本尊の釈迦如来、四天王、深沙大将、執金剛神の尊像が安置されていました。後世の再興像を含むこれらの像は現在霊宝館に収蔵されており、特に四天王立像（展示中）は重要文化財に指定され、鎌倉時代の仏師快慶の作として有名です。

(F)



現在の六角経蔵



基壇についた取っ手

連載

高野山の古建築

第三回 国宝 金剛峯寺不動堂(二)

(公財)和歌山県文化財センター 鳴海 祥博

国宝金剛峯寺不動堂は、かつては山内にあった一心院というお寺のお堂でした。明治四十一年(一九〇八)、由緒ある仏像とお堂は、民家から

離れた現在の場所に移築されたのです。それは保存のための英断でした。一心院は、行勝上人という京都仁和寺出身の名高い僧に

よって創立されました。行勝上人に帰依した鳥羽上皇の息女、八條女院の願いによって不動堂は建てられた、と高野山の記録にあります。八條女院は十二世紀末に

と、ぎゅうぎゅう詰めで、とても礼拝するような置きかたはできません。更に、須弥壇の上をよく見ると厨子の置かれていた形跡が残っています。そしてその形跡から復原できる厨子には、本尊の不動明王坐像は大き過ぎて入りません。

本尊だったのでないかと思えるのです。「不動堂」は、実は古記録にある阿弥陀三尊を祀った「一堂」だったのではないのでしょうか。でも、阿弥陀三尊を安置する建物が「阿弥陀堂」ではなく何故「一堂」と記されているのでしょうか。中世の一心院で「二十五三昧講」という儀式のあったことが知られています。それは死を目前にした仲間の僧を囲んで、極楽往生を願う儀式です。この「一堂」こそ阿弥陀三尊の前で極楽往生を願い、僧達が往生を遂げた場「往生堂」「葬堂」であったと想像するのです。そんな特別な場所であったから「一堂」という不思議な名で呼ばれたのでしょうか。そしてこの不動堂こそ一心院の「一堂」、つまり僧達が往生を果たしたお堂だったと思うのです。



矜羯羅童子

不動明王坐像

制多伽童子



五坊寂靜院に伝わる阿弥陀三尊像



痕跡から復原した不動堂安置の厨子

不動堂の本尊不動明王坐像と脇侍の国宝八大童子像は、今は霊宝館に安置されていますが、この本尊と脇侍八大童子像の九体を、不動堂内部の須弥壇上に並べようとする

かかつて不動堂の前には心字池という池がありました。この構成は阿弥陀堂と浄土庭園を思わせます。一心院の来歴を記した古文書には、一心院には不動明王を安置した「本堂」と、阿弥陀三尊を安置した「一堂」があったと記されています。

一心院谷の五坊寂靜院という寺院に、かつて一心院に安置されていたという阿弥陀三尊像が伝えられています。比較的小さなこの阿弥陀三尊像なら、須弥壇の上に残る痕跡から復原した厨子にちょうど入りそうです。この阿弥陀三尊像こそ現在の不動堂本来の尊像ではないのでしょうか。

考古学から高野山の伽藍「中門」を考える(その一)

—天保十四年焼失中門の礎石群から

高野山開創千二百年記念大法会事務局 鳥羽 正剛

平成二十七年(二〇一五)、高野山は弘法大師空海(以下「大師」)がお開きになってから千二百年目の年を迎えます。これに際して、平成二十七年四月二日から五月二十一日にかけて、「高野山開創千二百年記念大法会」が執り行われます。

現在、その記念事業として、高野山の伽藍に「中門」を再建する事業を進めています。

中門を再建する場所には、かつての中門の建物を支えていた礎石群が地表面に露出しています(図1・2)。この場所は、「国史跡 金剛峯寺境内(伽藍地区)」に位置することから、再建にあたり、現存する礎石群や地下遺構の現状を確認するための発掘調査を行う必要がありました。

そこで、平成十八年度に第一次発掘調査(調査機関 高野町教育委員会)、平成十九年度には第二次、第三次発掘調査(調査機関 高野町教

育委員会・財元興寺文化財研究所)が行われました。

すでに、第一次と第二次発掘調査結果の概要については、『霊宝館だより』(第八十五号)で紹介されましたが、改めてこれら三次の発掘調査の結果を通じ、考古学の観点から中門の歴史的存在、そして、この度再建される中門の意義について考えてみたいと思います。

その前にまず、なぜ大師が高野山をお開きになったかについて、少し述べたいと思います。

弘仁七年(八一六)六月、大師は嵯峨天皇に高野の地を賜りたいとの旨を願い出されました。そして、高野の地が下賜され、高野山をお開きになり、この時からその歴史が始まります。

大師がお考えになられた高野山開創の目的は、「国家」と「多くの修行者」のためというものでした。

まず一つ目の「国家」とは、一般的に天皇統治下の国土と国民を意味しますが、大師は「国家」をこの国土である環境世界と、そこに住まう、「一切の衆生(生きとし生けるもの)」とお考えになりました。つまり、「衆生救済」のためとされました。

次に二つ目は、「多くの修行者」のためとされました。

密教の修行は、都のような場所ではなく、人里離れた奥深い森林や、深山の平地のある場所が「多くの僧侶の養成」、つまり「人材育成」のために必要とお考えになったのでした。

そうして、「衆生救済」と「多くの修行者」のために、修禪の一院を建立したいとご誓願され、開創されたのが高野山、つまり修行道場である伽藍なのでした。

現在、伽藍には多くの諸堂が建ち並んでいます。文献調査の結果、その内のいくつ

かの建物は、開創当初より建替、再建などを繰り返しながら今日にいたっていることがわかりました。

伽藍が開創された当初の状況は、『高野春秋編年輯録』(享保四年(一七一九)編纂)に窺うことができ、中門については承和十四年(八四七)の項に「落慶中門」という記録があります。

中門は、真言密教の教義上、最重要地である伽藍を結界し、またその入口の門でもあります。したがって、開創当初より伽藍を構成する金堂や御社(高野明神社)と並んで、不可欠な建物です。

このことから、承和十四年以前にも、当然前身建物である中門が伽藍に存在していたと考えられています。

また、中門は天保十四年(一八四三)の火災により焼失した記録があります。そのため、発掘調査を行う時点で、中門跡で露出している礎石群は、天保年間の火災以降、現状保存されているという見解と、火災後、礎石は取り除かれ、後世になって中門跡の礎石のように見せるために、同様な石を再設置したのではという

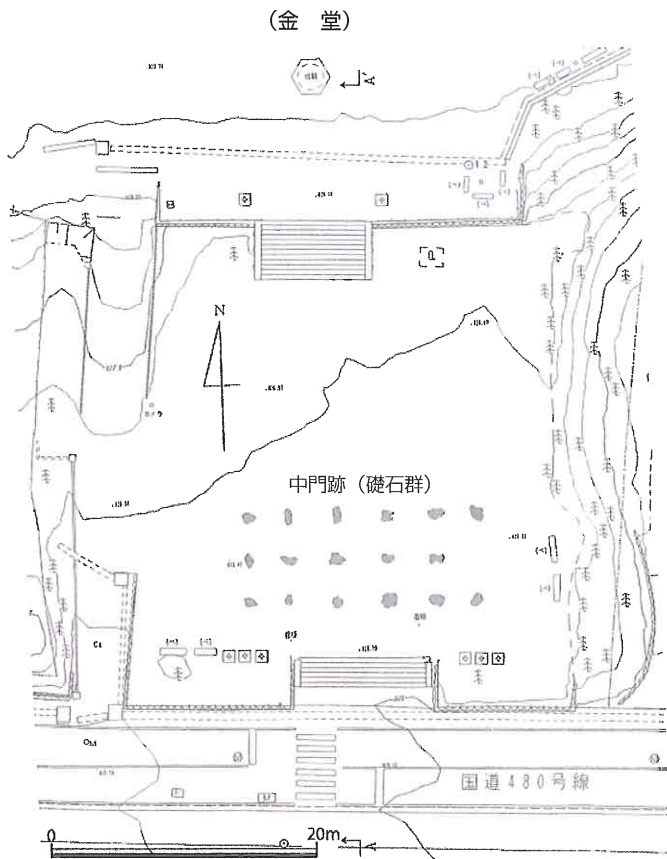


図2 中門跡現況測量図

『高野町文化財調査報告書第3集 史跡 高野山 金剛峯寺中門跡 第1次～3次調査』(金剛峯寺、2009年)より転載・加筆



図1 伽藍中門再建場所 (南から)
手前は中門礎石群、中央奥は金堂、右奥は大塔



図3 第二次発掘調査 調査区近景 (南から)
中門礎石群の周囲で検出された天保14年(1843)の火災跡(赤い土の部分)

見解がありました。

これらのことを踏まえて、第一次、第二次発掘調査を行いました。

その結果、現在中門跡で露出している礎石群とその周囲、つまりかつて中門が存在した範囲で、高温の火を受けて赤く焼き締まった土(焼土)が検出されました(図3)。

この状況から、赤く焼き締まった土は、中門が焼失した天保十四年の火災跡であり、また礎石群は天保年間の火災以降、後世に再設置されたものではなく、当時より露出したまま現状保存されていたことが明らかになりました。

ではなぜ、今日まで中門の礎石群が現状保存されてきたのでしょうか。

それは、単に中門の火災発生現場が、現在まで放置されたとは考えられません。恐らく、この状況は、大師が開創した当初より連綿と存在してきた中門の重要性、そしてその再建を先徳が後世に伝え託すために、敢えてメッセージとして残した可能性があります。

もしそうであるならば、この度の中門再建事業は、高野山の千二百年の歴史と文化を、さらに後世に伝える大変重要な事業であると言えます。

高野山の文化

高野山金剛峯寺の発生と修験道

元高野山大学教授 日野西 眞定

(二) 弘法大師空海の考えた金剛峯寺の姿

私は、昭和五十七年（一九八二）に、
靈宝館所蔵の、編者懐英自筆本を底本
にして、『新校高野春秋編年輯録』を

名著出版社より出版した。その時、懐
英自筆本に、結界内に金剛峯寺の主な
諸堂を配置した絵図が挿入されてあつ
たので、同書にも入れておいた。この
絵図の原本は、正式には「金剛峯寺根
本縁起」と呼ばれるもので、金剛峯寺
の最も重要な書類で、御影堂宝蔵に保
管されていた御手印縁起類十本の中の
第一本で、別名「御手印縁起」「山絵図」
とも呼ばれる。重要文化財に指定され
ている。この原本が摩滅し、不鮮明に
なったため、建武二年（一三三五）に
臨模（りんも）（手本を上から透き写しをするこ
と）したものとして伝えられる。そのため
に、大師以後の建立物も描かれている
が、大師の意図を最もよく残している
と考えられている。拙著『高野山古絵
図集成』（タカラ写真製版株式会社版）

には、この両絵図を並べて掲載してお
いた。（解説は、同書の『解説・索引編』
による）。

ここで、後から書き入れられたもの
は別として、注目されるものを書き出
しておく、まず第一に、壇場中央に
建立されている「大塔」である。これ
は明らかに密教の塔で、日本で最初に
建立されたものである。この塔の建立
には、弘法大師空海の高野山に密教の
堂塔伽藍を建立することについて、強
い意志が働いたことと考えられる。し
かし、実際の建立は第二代目の眞然が
行っているのである。

その他、金堂を「御願堂」と書いて
いるのは、この堂の再建を、朝廷に願
い出ることが出来たからだといわれて
いる。その当時には、朝廷が寄進者を
定め、またその人もこれに従うと、朝
廷に信頼され、昇進の道が開かれたの
である。僧坊は僧侶達の住房であるが、

廿一間僧房（『三僧記類徒』）と「十二
間僧坊」（『高野山秘記』）の両説があ
るが、後者の方が正しいと考えられる。
（前出『解説・索引』（一）「金剛峯寺
根本縁起」）。

大門であるが、
卍 金剛峯寺大門

とある。明らかに「鳥居」である。寺
で門が鳥居であるのは修験道の道場で
ある。但馬支所の兵庫県城崎郡日高町
山宮の大岡寺には、山麓の周囲を囲ん
で四本の鳥居が存在している時代が
あったのを報告したことがある。それ
は同寺所有の永暦二年（一一六一）の
「法進大岡寺敷地山林ノ事」に記され
ている。こういう寺もあるが、高野山
の場合は、大門は鳥居であるが、壇場
に存在する中門は楼門である。これが
永治元年（一一四一）には、共に楼門
になり、一般の寺の形式になるのであ
る。その重要な史料を紹介する。

(一)『又統宝簡集』(『大日本古文書』高野山文書三十八)
 「二七四二 金剛峯寺焼失修復注進状草」に、

注進ス、金剛峯寺焼失修復等ノ事
(九四)
 正暦五年甲午七月六日、大塔并ビニ講堂(但シ、今人多ク金堂ト稱ス)、廿一間僧房、雷火ノ為メニ焼失ス。

長徳四年、講堂之レヲ始メテ造クラル。紀伊國司景理奉行。

(2)『高野春秋編年輯録』(巻第六)
(二四)
 保延六年庚申ノ年春正月朔日(第九世檢)
 授執行琳賢朝拝ス。

二月。大門ヲ經營ス。是レ賢師ノ發願也。考ルニ、明僧敏授師ハ、古跡基ヲ尋ネ、坂下ニ草表ヲ立ツ云々。

(二四)
 永治元年冬十一月廿九日、大門及ビニ金剛力士ヲ落慶ス。大導師ハ檢授琳賢師之ヲ執行ス。日記ヲ考フルニ、昔年花表ヲ除キ、賢師、三間ノ橋門并ビニ一丈五尺ノ一王ヲ建替ス。中略

以上であるが、これにより、弘法大師空海が最初に高野山に金剛峯寺を建立するについては、修験道の知識によりこれを考えていることが分かる。もつとも、密教の道場建設は、日本では初めてのことであり、修験道の堂塔建立が、特に山岳霊場では普及していたことによると考えられる。そして、

これを後に金剛峯寺を継いだ琳賢檢授等により、密教に相応しい道場へと、三百二十二年ほどかけて発展させているのである。

なお、大門の正面に掛けられた二枚の額には、覚鑿上人(一〇九五〜一一四三)の書いた『弘法大師講式』にある「日日ノ影向ヲ闕カサズ」(向かつて右)、「処々ノ遺跡ヲ檢知ス」(向かつて左)の文句が書かれている。これは、弘法大師空海は、毎日御廟から姿を現して人を救っているという意味で、ここから大師の同行二人の信仰が生まれたと私は考えている。

ところで、その字の筆者であるが、『高野山御幸記』の「大門ノ額」によると、次のようである。

建長二年(一二五〇)庚戌九月十七日、之レヲ懸ク。是レ則チ禪定殿下ノ御手跡也。御法名發生金剛云々。昔ノ額ハ法性寺博陸殿下忠通ノ御手跡云々。
(二四)
 永治元年十一月廿九日、大門金剛力士供養云々。

とある。最初の額の字は、法性寺博陸殿下忠通(一〇九七〜一一六四)の永治元年(一一四二)の御手跡であるが、忠通は関白に任ぜられ、書にもすぐれ、法性寺流の祖といわれた(『日本史辞典』角川書店)。その次の字は、禪定殿下、つまり九條道家(一一九三〜一二五

二)の御手跡であるが、摂政・氏長者を勤めた。特に法性寺流の祖であった博陸殿下忠通の御手跡であった時代が存在したことにより、これが後に所謂弘法大師流の字だといわれるようになったと考えられているようである。

最後に付け加えておきたいことは、『後宇多院御幸記』(正和二年(一一三三))に、

是ヲ以テ、昔都藍比丘尼靈峯ニ詣テ、既ニ五障ノ拙姿ヲ恥ツ。今、数輩ノ優婆夷ノ仙躰ヲ拜セント欲スルナリ。靈地ヲ掃セラレテ、五障ノ愚形ヲ悲シム。

とあることにより、高野町花坂の鳴川大明神社には、都藍比丘尼が訪れた伝承が存在するとの私の報告は、名古屋大学大学院教授阿部泰郎教授等、同じ丘尼を研究するグループの学者達からも認められ、高野山も、そのの一つと考えられるようになった。

柳田國男・五来重先生も、この比丘尼の活動を注目されている。後宇多院は、正和二年に参られているが、この時にも上皇がお参りに来られるというので、近くの女性達がお姿を拝みたいと、結果内に男装して入って来ており、追い出されている。それで、『後宇多院御幸記』は、高野山にはその昔、



都藍比丘尼が来て、鳴河を越えずに帰った伝承があると記したのである。この院の御幸記を見ると、その参詣の真面目さが特に感ぜられ、さらにその造詣の深さに感動させられる。そこからこの記述が生まれ、今私達に教えて下さっているのである。

こう考えてくると、高野山はこの比丘尼が活動した日本文化の發生の時代に、既に聖なる山の仲間入りをしていたことが分かる。弘法大師空海は、それを直感的に知るところがあつて高野山を選ばれたのではないかと考える次第である。

Essay

孔雀伝説

高野山大学准教授

井上 ウイマラ

重文 孔雀明王像
金剛峯寺



なったのは、私が還俗して帰国してからのことであった。

私は田舎に生れ、自然の中で遊び育ったが、出家してからは僧院での瞑想と学問修行に明け暮

れ、それから外国の諸都市での布教生活が続

いたため、自然環境から

はしばらく遠ざかって

いた。それが、高野山大

学にご縁をいただき、お大師さんが修禪の地としてこの地を選んだ理由を捜し求めて歩き回

り、女人道周辺で朝日や夕日の美

さを愛で、伽藍の孔雀堂にもおまいりするようになってから、このパ

リッタの意味がふと腑に落ちるよ

うな瞬間を体験させてもらうよ

になったのだ。それまでは、朝日や夕日に手を合わせて拝むのが、なん

となく気恥ずかしかったのだが、それにも自然と心がこめられるようになった。

それはきつと、さまざま地域に伝わる伝統的な信仰に根付きなが

らも、ブツダの教えを大切にしよう

と努力してきた先人たちの心の機微に触れることができた瞬間なのではなかったかと思う。同時にまた

上座部仏教僧としてビルマ、タイ、スリランカで修行し、カナダ・イギリス・アメリカで瞑想指導や布教活動に携わっていた頃、毎週木曜日に唱える経典に「孔雀経」というパリッタ（守護のための短い経）があった。「黄金のような色をして大地を照らすもの、智慧の目を備えた唯一の王が昇る。その黄金の色を備えた大地を照らすものを礼拝します。あなたに守られて、私たちは今日一日を過ごしたいと思えます。」

諸法を洞察したバラモンたち、私は彼らを礼拝し、彼らも私を守りたまえ。私は諸仏を礼拝できますように、悟りを礼拝できますように。解脱者を礼拝できますように、解脱に礼拝あれ。かの孔雀はこのパリッタを唱え餌を捜し求めて歩き回る」

孔雀は毒蛇などに強く、森で修行するものたちにとっては強さと美しさを兼ね備えた存在であったのだろう。ブツダの前世に関する物語を集めたジャータカに起源を持つこのパリッタの意味が実感できるように

それは、宗教一般に対する自分の傲慢な思い込みが溶けた瞬間でもあったように思う。

太陽が地上のすべての生き物たちを平等に照らすように、お大師さん

もすべての生き物たちに向けて、大悲と智慧の光を降り注いでくださっているのだと思う。お大師さんに導

かれて、大自然の中で実にさまざま

な光と色の変化に照らされながら人間の営みを見守っていると、生きる

ことの苦しみや悲しみが、いのちを育む心を育てる力の源泉なのではな

いかと思えてくることがあるから不思議である。



コラム

「神は細部に宿る」(God is in details)

第六章

前回は、細部比較の方法の弱点を仏像の作り方からお話ししました。そして、深沙大将像が快慶の作なのかどうかということでしたが、皆さん解決出来たでしょうか？

さて、美術品の鑑定方法は、これだけではありません。近年は科学技術が進み、人間の目では見えない仏像の内部を見ることの出来るX線透過撮影(レントゲン)、さらにはそれを立体画像化することの出来るX線CTスキャンなどが開発されています。これからのその方法は増え続け、精度も上がっていくでしょう。科学技術は、

人間の力が及ばない領域のデータを我々にもたらしてくれます。

しかし、いくら科学技術が進んだとは言っても、芸術品はあくまでも人が作り、生み出すものです。

それは、逆に科学技術や機械の力が及ばない領域と言えるでしょう。芸術家の持つ筆や鑿^うによって表された繊細で微妙な表現は、機械にコピーは出来ても、ゼロから生み出すことは出来ません。

それに、人が作る芸術作品に、全く同じものはありません。一つの型で複数の同じものを作ることが出来るブロンズ像でも、原形は人間が作ります。人間が生み出す

芸術品には、作者の苦心やひらめき、個性、そして魂が籠もっています。だからこそ、芸術作品の細部に神は宿るのではないのでしょうか。

果たして、機械が作ったものを芸術作品と呼べるのでしょうか？ 私はそうは思いません。機械が個性を持つているはずはありませんし、魂が籠められているはずはないのですから。

六回にわたってお話ししてきた本コラムは、今回が最終回です。「神は細部に宿る」という言葉について、芸術作品の細部比較による鑑定法や仏像の製作事情からお

話しました。

「神は細部に宿る」という言葉の真意は、実のところ分かりません。本コラム第1章で、お話ししたように、言葉の主が誰か分からないからです。しかし、誰か分からないということが、人によって意味の解釈が異なるという状況を生んできました。そこにこの言葉の魅力があり、この言葉自体に神を宿らせることになった...と考えるのは、本当の意味を見いだせない私自身の単なる逃げ口上でしょうか。(T)



重文・五坊寂靜院阿弥陀如来立像X線写真(白黒反転)
釘の刺さっている位置や構造がよく分かります。



月輪形木札

国宝・八大童子立像の内烏俱婆識童子像X線写真(白黒反転)

お腹の辺りに月輪が蓮台に乗った形の木札が納められています。他の運慶作品にも納められていることから運慶作品の特徴とされます。このX線調査によって運慶作であることがほぼ確実となりました。

霊宝館の庭園

野村・ノムラモミジ・濃紫・のうむら

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

霊宝館庭園林内のあちこちに季節によって、それぞれ趣の異なる広義の「紅葉」を観賞することのできる木が植えられています。

その木は、高野山でも摩尼山の自然林などに自生しているカエデ科のオオモミジ（別名・ヒロハモミジ）を親としてつくり出された園芸品種です。

品種名は、「野村」、ノムラモミジと表記されていることも。

植物関係書や図鑑などでは、葉が通年、紅(赤)色、もしくは濃紅色を



春から初夏



初夏



初夏から夏

していると紹介されていることもあります。落葉広葉樹ですから、春から晩秋を通じて、ということになります。植栽地の環境、個体によって微妙な色の違いや変化が見られます。

この木の年間の一般的な葉色の変化と、その主な理由について教わったことを要約して紹介します。春から初夏に入った頃は表皮細胞の表層部にアントシアン（赤色素体）が多く含まれるために明るい紅(赤)色をしています。初夏から夏になるにつれてアントシアンに対してクロロ

フィル（葉緑素）の割合がだんだん多くなり濃紫紅(赤)色となります。夏にはアントシアンの紅色が褪せて表層部にもクロロフィルが多くなり淡い紫赤色、緑を帯びた紫紅色のものが多くなります。

秋になり日照条件の変化や気温の低下などによってクロロフィルが分解して糖分が増加、葉柄の基部に離層という組織ができて糖分の移動が妨げられて蓄積しアントシアンに変化して、晩秋には鮮やかな紅(赤)色となります。これが狭義の「紅葉」

です。

このような年間の葉色の変化のうち、濃紫紅(赤)色は独特の色調（いろあい）なので、このことが、この木の古い品種名「濃紫」のうむら、の命名の理由の一つではと思われれます。

今年に霊宝館開館九十周年、記念日の五月十五日頃には庭園内の「野村」が祝典を寿ぐごとくに、新緑や大杉の緑の中で、実に明るい紅(赤)葉をそよがせていました。

六月に入ってから濃紫紅(赤)色へと、お色直しが、はじまっています。

庭園内では、この「野村」を、はじめとする植物の色彩変化の妙を、ゆったりとした雰囲気の中で体感することができます。